

「令和の開拓者たち 千代田区立麴町中学校長 工藤勇一」文藝春秋

庄司英樹64回（昭和32年卒）

『文藝春秋』七月号（2019）を開くと、フリーライター 川内イオ氏による“時代を切り拓く“異能”の人びとの物語”「山形の少年“元長髪ロック少年”が名門公立中に革命を起こした」という見出しが目に飛び込んできた。鶴翔同窓会の工藤勇一氏85回（昭和53年卒）の教育改革への取り組みが10ページにわたって紹介されている。

2014年に校長として赴任して5年。工藤は名門・麴町中で「宿題」「中間・期末テスト」「担任制」を廃止し話題を呼んだ。前代未聞の取り組みだが、工藤が考える学校教育の目的「社会のなかでより良く生きてゆくために自ら考え、決断し、行動できる自律した人間を育てること」を達成するために、必要と判断してのことだった。

「消去法で出会った天職」工藤は高校の教師になろうと考えた。教育実習先は思い出深い鶴岡南高校を選んだ。ここで工藤は教師という仕事に惚れ込む。

「えっ、こんなに楽しい仕事があるの？天職かもしれない。」..詳しくは本文を呼んでいただきたい。

工藤は卒業式も変えた。空疎で決まりきった言葉を並べる式辞、送辞、答辞を廃止し、卒業生代表に「本当に伝えたいこと」を考えさせ、自分の言葉で原稿を書かせた。卒業生代表が伝えたのは次のような言葉だった。「一・二年生の皆さんに一番伝えたいことはリスペクトです。僕らの学年には癖の強い子がたくさんいます。でも、誰かの悪口を言ったり、からかったりして楽しいと思っているのは、本当の楽しさではありません。僕らは『出る杭は打たない』学年でした。お互いをリスペクトできる、のびのびとした学校生活はとても楽しいものです」

保護者の多くは涙を流し、万雷の拍手を贈ったという。それを見た工藤は『リスペクト』とはうちの学校らしいと感じ、麴町中の教育目標を「自律、貢献、創造」から「自律、尊重、創造」に変えることにした。工藤の教育改革に終わりはない。

また、工藤勇一校長は生徒を考えなしに叱る教師を怒っている。「三年ほど前のこと。生徒を怒鳴っている教師がいたため、呼んで理由を尋ねた。『嘘をついたから』ということだったが、内容を聞けばよくある小さな嘘にすぎなかった。そして、ここから工藤の呼びかけが始まる。「僕たちが本気で叱るのは、命や人権に関わる時だといつも話しているよね？僕だってしょっちゅう嘘をついているよ。嘘ぐらいであんなに怒鳴るなら、人権や命に関わる問題が発生した時、君が叱る最高レベルはどうなるんだ？あれ以上の」ものがあるのか？

「規格外の稀な人」を追うフリーライターの川内イオ氏による教育を考える上で示唆に富んだ同窓生の活躍を紹介している。

2019年8月13日